

方便品八箇の大事

第一 方便品の事 文句の三に云はく「方とは秘なり、便とは妙なり。妙方に達す即ち是真秘なり。內衣の裏の無価の珠を点ずるに、王の頂上の唯一珠有ると二無く別無く、客作の人を指すに、是長者の子と亦二無く別無し。斯くの如きの言は是秘是妙なり。経の唯我知是相、十方仏亦然、止々不須説、我法妙難思の如し。故に秘を以て方を釈し、妙を以て便を釈す。正しく是今品の意なり。故に方便品と言ふなり」と。記の三に云はく「第三に秘妙に約して釈すとは、妙を以ての故に即なり。前四時に通ぜしめんと欲する為に円を以て即と為し、三を不即と為す。故に更に不即に対して以て即を釈す」と。

御義口伝に云はく、此の釈の中に一珠とは衣裏珠、即ち頂上珠なり。客作の人と長者の子と全く不同之無し。所詮謗法不信の人は体外の権にして法用・能通の二種の方便なり。爰を以て無二無別に非ざるなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱へ奉るは是秘妙方便にして体内なり。故に妙法蓮華経と題し、次に方便品と云へり。妙楽の記の三の釈に「本疏の即是真秘の即を以円為即と消釈せり」と。即は円なれば法華経の別名なり。即とは凡夫即極にして諸法実相の仏なり、円とは一念三千なり。即と円と言は替はれども共に妙の別名なり。一切衆生実相の仏なれば妙なり、不思議なり。謗法の人今之を知らざる故に之を秘と云ふ。又云はく、法界三千を秘妙とは云ふなり。秘とはきびしきなり、三千羅列なり。是より外に不思議之無し。大謗法の人たりと云へども妙法蓮華経を受持し奉る処を妙法蓮華経方便品とは云ふなり。今末法に入って正しく日蓮等の類の事なり。妙法蓮華経の体内に爾前の人法を入るゝを妙法蓮華経方便品とは云ふなり。是を即身成仏とも如是本末究竟等とも説く。又方便とは十界の事なり、又は無明なり。妙法蓮華経は十界の頂上なり、又は法性なり。煩惱即菩提・生死即涅槃是なり。以円為即とは一念三千なり。妙と即とは同じ物なり。一字の一念三千と云ふ事は円と妙とを云ふなり。円とは諸法実相なり。円とは釈に云はく「円は円融円満に名づく」と。円融は迹門、円満は本門なり。又は止観の二法なり。又は我等が色心の二法なり。一字の一念三千とは慧心流の秘蔵なり。□は一念、員は三千なり。一念三千とは不思議と云ふ事なり。此の妙とは前三教に未だ之を説かざる故に秘と云ふなり。故に知んぬ、南無妙法蓮華経は一心の方便なり。妙法蓮華経は九識なり。十界は八識已下なり。心に留めて之を案ずべし。方とは即ち十方、十方は即ち十界なり。便とは不思議と云ふ事なり云云。

第二 諸仏智慧 甚深無量 其智慧門の事 文句の三に云はく「先に実を歎じ、次に権を歎ず。実とは諸仏の智慧なり、三種の化他の権実に非ず、故に諸仏と云ふ。自

行の実を顕はす、故に智慧と言ふ。此の智慧の体は即ち一心の三智なり。甚深無量とは即ち称歎の辞なり。仏の実智の豎に如理の底に徹することを明かす、故に甚深と言ふ。横に法界の辺を窮む、故に無量と言ふ。無量甚深にして豎に高く横に広し。譬へば根深ければ則ち条茂く、源遠ければ則ち流れ長きが如し。実智既に然り、権智例して爾なり云云。其智慧門とは即ち権智を歎ずるなり。蓋し是自行の道前どうぜんの方便、進趣の力有り。故に名づけて門と為す。門より入って道中に到る、道中を実と称し、道前を権と謂ふなり。難解難入とは権を歎ずるの辞なり。不謀にして而も了し無方の大用あり。七種の方便しきたくもて測度すること能はず。十住に始めて解す。十地を入と為す。初と後と挙ぐ、中間の難示難悟は知んぬべし。而るに別して声聞縁覚の所不能知を挙ぐることは執重きが故に別して之を破するのみ」と。記の三に云はく「豎高横広とは中に於て法・譬・合あり。此を以て後を例す。今実を釈するに既に周く横豎を窮めたり。下に権を釈するに理深極なるべし。下に当に権を釈すべし、預め其の相を述す。故に云云と註す。其智慧門とは、其とは乃ち前の実果の因智を指す。若し智慧即門なれば門は是権なり。若し智慧の門なれば智は即ち果なり。蓋し是等とは、此の中に須く十地を以て道前と為し妙覚を道中と為し証後しょうごを道後と為すべし。故に知んぬ、文の意は因の位に在り」と。

御義口伝に云はく、此の本末の意分明なり。中に豎高横広とは、豎は本門なり、横は迹門なり。根とは草木なり、草木は上へ登る。此は迹門の意なり。源とは本門なり、源は水なり、水は下へくだる。此は本門の意なり。条茂とは迹門十四品なり、流長とは本門十四品なり、智慧とは一心三智なり、門とは此の智慧に入る処の能入の門なり、三智の体とは南無妙法蓮華経なり、門とは信心の事なり。爰を以て第二の巻に以信得入と云ふ。入と門とは之同じきなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱へ奉るを智慧とは云ふなり。譬喩品に云はく「唯一門有り」と。門に於て有門・空門・亦有亦空門・非有非空門くうもんあるなり。有門は生なり、空門は死なり、亦有亦空門は生死一念なり、非有非空門は生に非ず死に非ず。有門は題目の文字なり、空門は此の五字に万法を具足して凝らざる義なり、亦有亦空は五字に具足する本迹なり、非有非空門は一部の意なり。此の内証は法華已前の二乗の智慧の及ばざる所なり。文句の三に云はく「七種の方便測度すること能はず」と。今日蓮等の類は此の智慧に得入するなり。仍って偈頌に「除諸菩薩衆しんりきけん 信力堅固者ごしゃ」と云ふは我等行者の事を説くなり云云。

第三 唯以一大事因縁の事 文句の四に云はく「一は則ち一実相なり。五に非ず三に非ず、七に非ず九に非ず。故に一と言ふなり。其の性広博にして五三七九より博し、故に名づけて大と為す。諸仏出世の儀式なり、故に名づけて事と為す。衆生に此の機有って仏を感ずる、故に名づけて因と為す。仏機を承けて而も応ず、故に名づけて縁と為す。是を出世の本意と為す」と。

御義口伝に云はく、一とは法華經なり、大とは華嚴なり、事とは中間の三昧なり。法華已前にも三諦あれども碎けたる珠は宝に非ざるが如し云云。又云はく、一とは妙なり、大とは法なり、事とは蓮なり、因とは華なり、縁とは経なり云云。又云はく、我等が頭は妙なり、^{のんど}喉は法なり、胸は蓮なり、^{はら}胎は華なり、足は経なり。此の五尺の身は妙法蓮華經の五字なり。此の大事を釈迦如来四十余年の間隱密し玉ふなり。今經の時、説き出だし玉ふ。此の大事を説かんが為に仏は出世し玉ふ。我等が一身妙法五字なりと開仏^{ちけん}知見する時即身成仏するなり。開とは信心の異名なり。信心を以て妙法を唱へ奉らば^{やが}聽て開仏知見するなり。然る間信心を開く時、南無妙法蓮華經と示すを^{じぶつちけん}示仏知見と云ふなり。示す時に靈山淨土の住所と悟り、即身成仏と悟るを悟仏知見と云ふなり。悟る当体、^{じきしどうじょう}直至道場なるを^{にゅうぶつちけん}入仏知見と云ふなり。然る間信心の開仏知見を以て正意とせり。入仏知見の入の字は、迹門の意は実相の理内に歸入するを入と云ふなり。本門の意は理即本覺と入るなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る程の者は宝塔に入るなり云云。又云はく、開仏知見の仏とは九界所具の仏界なり。知見とは妙法の二字、止觀の二字、^{じゃくしじょう}寂照の二徳、生死の二法なり、色心因果なり。^{しよせん}所詮知見とは妙法なり。九界所具の信心を法華經の知見にて開く事なり。^{ここ}爰を以て之を思ふに仏とは九界の衆生の事なり。此の開覺顯はれて今身より仏身に至るまで持つや否やと示す処が、妙法を示す示仏知見と云ふなり。師弟感応して受くる時、^{かんのう}如我等無異と悟るを悟仏知見と云ふなり。悟りて見れば法界三千の己々の当体法華經なり。此の内証に入るを入仏知見と云ふなり。秘すべし云云。又云はく、四仏知見とは^{はっそう}八相なり。開とは^{しやう}生の相なり、入とは^し死の相なり、中間の示悟は六相なり。^{げてん}下天・^{たくたい}託胎等は示仏知見なり。出家・^{ごうま}降魔・成道・轉法輪等は悟仏知見なり。權教の意は生死を遠離する教なるが故に四仏知見に非ざるなり。今經の時生死の二法は一心の妙用、有無の二道は本覺の真徳と開悟するを四仏知見と云ふなり。四仏知見を以て三世の諸仏は一大事と思し召し世に出現したまふなり。此の開仏知見の法華經を法然は^{しゃへいかくほう}捨閉閣抛と云ひ、弘法大師は第三の劣、^{けるん}戲論の法との^馬しれり。五仏同道の舌をきる者に非ずや。^{じかく}慈覺大師・^{ちしやう}智証等は悪子に劍を与へて我が親の頂を切らする者に非ずや云云。

又云はく、一とは中道、大とは空諦、事とは假諦なり。此の^{えんゆう}円融三諦は何物ぞ。所謂南無妙法蓮華經是なり。此の五字は日蓮出世の本懐なり、之を名づけて事と為す。日本国の一切衆生の中に日蓮が弟子檀那と成る人は「衆生有此機感仏、^{しゅじやうしきかんぶつ}故名為因」の人なり。夫が為に法華經の極理を弘めたるは「^{それ}仏承機而応、^{ぶつしやうきにおう}故名為縁」に非ずや。因は下種なり、縁は三五の宿縁に歸するなり。事の一念三千は日蓮が身に当てゝの大事なり。一とは一念、大とは三千なり。此の三千をときたるは事の因縁なり。事とは衆生世間、^{ごあんせけん}因とは五陰世間、縁とは国土世間なり。国土世間の縁とは南閻浮提なり、妙法蓮華經を

弘むべき本縁の国なり。経に云はく「閻浮提の内に広く流布せしめて、断絶せざらしめん」と是なり云云。

第四 五濁の事 文句の四に云はく「劫濁は別の体無し。劫は是長時、刹那は是短時なり。但四濁に約して此の仮名を立つ。文に劫濁乱時と云ふは即ち此の義なり。衆生濁も亦別の体無し、見慢果報を攬る上に此の仮名を立つ。文に衆生垢重と云ふは即ち此の義なり。煩惱濁は五鈍使を指して体と為す、見濁は五利使を指して体と為す、命濁は連持する色心を指して体と為す」と。

御義口伝に云はく、日蓮等の類は此の五濁を離るゝなり。我此土安穩なれば劫濁に非ず、実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず、煩惱即菩提・生死即涅槃の妙旨なれば煩惱濁に非ず、五百塵点劫より無始本有の身なれば命濁に非ざるなり。正直捨方便但説無上道の行者なれば見濁に非ざるなり。所詮南無妙法蓮華経を境として起こる所の五濁なれば、日本国の一切衆生五濁の正意なり。されば文句の四に云はく「相とは四濁増劇にして此の時に聚在せり。瞋恚増劇にして刀兵起り、貪欲増劇にして飢餓起り、愚癡増劇にして疾疫起り、三災起こるが故に煩惱倍隆んにして諸見転熾んなり」と。経に「如来現在、猶多怨嫉、況滅度後」と云ふは是なり。法華経不信の者を以て五濁障重の者とす。経に云はく「五濁の悪世には、但諸欲に楽著せるを以て、是くの如き等の衆生、終に仏道を求めず」云云。仏道とは法華経の別名なり。天台云はく「仏道とは別して今経を指す」と。

第五 比丘比丘尼 有懐増上慢 優婆塞我慢 優婆夷不信の事 文句の四に云はく「上慢と我慢と不信とは四衆通じて有り。但し出家の二衆は多く道を修し禅を得、謬って聖果と謂ひ、偏に上慢を起す。在俗は矜高にして多く我慢を起す。女人は智浅くして多く邪僻を生ず。自ら其の過を見ずとは、三失をもって心を覆ふ。疵を蔵して徳を揚げ自ら省みること能はず。は無慙の人なり。若し自ら過を見れば是有羞の僧なり」。記の四に云はく「疵を蔵す等とは三失を積せるなり。疵を蔵して徳を揚ぐは上慢を積す。自ら省みること能はざるは我慢を積し、無慙の人とは不信を積す。若し自ら過を見るは此の三失無し。未だ果を証せずと雖も且く有羞と名づく」と。

御義口伝に云はく、此の本末の積の意は五千の上慢を積するなり。委しくは本末を見るべきなり。比丘・比丘尼の二人は出家なり。共に増上慢と名づく。疵を蔵して徳を揚ぐるを以て本とせり。優婆塞は男なり、我慢を以て本とせり。優婆夷は女人なり、無慙を以て本とせり。此の四衆は今日本国に盛んなり。経には其数有五千と有れども日本国に四十九億九万四千八百二十八人と見へたり。在世には五千人仏の座を起てり。今末法にては日本国の一切衆生悉く日蓮が座を起てり。比丘・比丘尼増上慢とは道隆・良観等に非ずや。又鎌倉中の比丘・比丘尼等に非ずや。優婆塞とは最明寺、優婆夷とは上

下女人に非ずや。敢へて我が過を知るべからざるなり。今日蓮等の類を誹謗して悪名を立つ。豈不自見其過の者に非ずや。大謗法の罪人なり。法華の御座を立つ事疑ひ無き者なり。然りと雖も日蓮に値ふ事是あ併しかしながら礼仏而退らいぶつにたいの義なり。此の礼仏而退きょうせんは輕賤の義なり。全く信解の礼退に非ざるなり。此等の衆は於戒有欠漏の者なり。文句の四に云はく「於戒有欠漏とは律儀とがに失有るを欠と名づけ、定共・道共に失有るを漏と名づく」と。此の五千の上慢とは我等所具の五住の煩惱なり。今法華經に値ひ奉る時、慢即法界と開きて礼仏而退するをぶついとくここ仏威徳故去と云ふなり。仏とは我等所具の仏界なり。威徳とは南無妙法蓮華經なり。故去とは而去不去の意なり。普賢品のにこふこ作礼而去之を思ふべきなり。又云はく、五千退座と云ふ事法華の意は不退座なり。其の故は諸法実相略開三顯一の開悟なり。さて其の時は我慢増上慢とは慢即法界と開きて本有ほんぬの慢機ごしゅうなり。其数有五千とは我等が五住の煩惱なり。若し又五住の煩惱無しと云はゞ法華の意を失ひたり。五住の煩惱有り乍ら本有常住ぞと云ふ時、其数有五千と説くなり。断惑に取り合はず、其のまま本有の妙法五住と見れば不自見其過と云ふなり。さて於戒有欠漏とは小乗權教の対治衆病の戒法にては無きなり。是名持戒の妙法なり。故に欠漏の当体其のまま僣是名持戒の体なり。然るに欠漏を其の僣本有と談ずる故に護惜其瑕玼と説くなり。元より一乗の妙戒なれば一塵含法界一念遍十方の故に是せしやうちいしゆつ小智已出と云ふなり。糟糠とは塵々法々本覺の三身なり。故にすくなき福德の当体も本覺無作の覺体なり。不堪受是法とは、略開の諸法実相の法体を聞きて其のしんし僣開悟するなり。さて身子尊者鈍根のために分別解説したまへと請ふ、広開三の法門をば不堪受是法と説けり。さて法華の実義に歸して見れば妙法の法体は更に能受所受を忘るゝなり。不思議の妙法なり。本法の重を悟って見る故にししゆむしよ此衆無枝葉と云ふなり。かゝる内証は、純一実相 実相外更無別法なれば唯有諸貞実なり。所詮貞実とは色心を妙法と開く事なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る処を唯有諸貞実と説くなり。諸とは諸法実相の仏なり、諸は十界なり、貞実は十界の色心を妙法と云ふなり。今經に限る故に唯と云ふなり。五千の上慢ほかの外全く法華經これ之無し。五千の慢人とは我等が五大なり。五大即妙法蓮華經なり。五千の上慢は元品の無明なり。故に礼仏而退なり。此は九識八識六識と下る分なり。流轉門の談道なり。仏威徳故去とはげんめつもん還滅門なり。然れば威徳とは南無妙法蓮華經なり。本迷本悟の全体なり。能く能く之を案ずべし云云。

第六 如我等無異 如我昔所願の事 疏に云はく「因を挙げて信を勧む」と。

御義口伝に云はく、我とは釈尊、我実成仏久遠の仏なり。此の本門の釈尊は我等衆生の事なり。如我の我は十如是の末の七如是なり。九界の衆生は始めの三如是なり。我等衆生は親なり、仏は子なり。父子一体にして本末究竟等なり。此の我等を寿量品にして無作の三身と説きたるなり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱ふるは是なり。爰を以て

之を思ふに、釈尊総別の二願とは我等衆生の為に立てたまふ所の願なり。此の故に南無妙法蓮華經と唱へ奉る日本国の一切衆生を、我が如く成仏せしむと云ふ処の願、^{しかしなが}併ら如我昔所願なり。^{つい}終に引導して己身と和合するを、^{こんじゃ いまんぞく}今者已満足と意得べきなり。今者已満足の已の字すでにと読むなり。何れの処を指して^{すで}已にとは説けるや。凡そ所釈の心は諸法実相の文を指して已にとは云へり。^{しか}爾りと雖も当家の立義としては南無妙法蓮華經を指して今者已満足と説かれたりと意得べきなり。されば此の如我等無異の文肝要なり。如我昔所願は本因妙、如我等無異は本果妙なり。妙覺の釈尊は我等が血肉なり。因果の功德は骨髓に非ずや。^{こつずい}釈には^{こ いんかんしん}拳因勸信と。拳因は即ち本果なり。今日蓮が唱ふる処の南無妙法蓮華經は末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり。^{あに}豈今者已満足に非ずや。已とは建長五年三月廿八日に始めて唱へ出だす処の題目を指して已と意得べきなり。妙法の大良薬を以て一切衆生の無明の大病を治せん事疑ひ無きなり。此を思ひ^や遣る時は満足なり。満足とは成仏と云ふ事なり。釈に云はく「^{えんゆうえんまん}円は円融円満に名づけ、^{とん}頓は頓極頓足に名づく」と。之を思ふべし云云。

第七 於諸菩薩中 正直捨方便の事 文句の四に云はく「於諸菩薩中より下の三句は正しく実を顯はずなり。五乗は^{これ}是曲にして直に非ず。通別は^{へんぼう}偏傍にして正に非ず。今皆彼の偏曲を捨て、但正直の一道を説くなり」と。

御義口伝に云はく、此の菩薩とは九界の第九に居したる菩薩なり。又一切衆生を菩薩と云ふなり。今は日蓮等の類なり。又諸天善神等迄も是菩薩なり。正直とは煩惱即菩提・生死即涅槃なり。さて一道とは南無妙法蓮華經なり。今末法にして正直の一道を弘むる者は日蓮等の類に非ずや。

第八 当来世悪人 聞仏説一乘 迷惑不信受 破法墮惡道の事 御義口伝に云はく、当来世とは末法なり、悪人とは法然・弘法・慈覺・智証等なり、仏とは日蓮等の類なり、一乘とは妙法蓮華經なり。不信の故に三惡道に墮すべきなり。